

自由学園明日館



大きな窓と列柱が目を引き中央棟と両翼の教室棟がコの字を描く。ほぼ左右対称に配置された自由学園明日館。

動態保存されたF.L.ライトの  
プレーリースタイルの校舎

東京都豊島区の自由学園明日館は、羽仁もと子・吉一夫妻が大正10(1921)年に創立した女学校、自由学園の元校舎。F.L.ライトと遠藤新が設計を手がけた。国指定重要文化財としての価値を保存しながら、一般による利用を行う「動態保存」の初期の例でもある。



中央棟の左右にある大教室の1つ「としま」。当時の教室には照明がなかった。自由学園は女生徒26人から始まり、移転までの13年間、当地に所在した。



生徒自身が調理し、温かい食事を皆で食べた食堂。照明器具は、ライトが訪問した際に、天井が高いと感じ、急速デザインしたと言われる。



会議室からホール方向を望む。廊下から教室内へと空間が繋がっている。廊下の先、左側に大教室がある。



①遠藤新の設計した講堂。前後・左右が対称で、570名<sup>※</sup>を収容する計画だった。ここでも大谷石を使用。②中央棟の食堂・会議室に見られる物に似た丸型の照明器具や幾何学模様で飾られた窓がある。③2階席(手前)から階下を望む。



※現在は270名

羽仁夫妻は、自由な教育や女性の地位向上を求める大正デモクラシー時代を背景に、生活と結びついた新しい教育をめざした。その中で生徒たちが一緒に温かい食事を取ることを教育の中心に据え、当時の学校建築では珍しく校舎中央に食堂を配している。明日館の設計は夫妻の教育思想に共感した近代建築の巨匠、フランク・ロイド・ライトと、その高弟の遠藤新である。中央棟と西教室棟は大正11(1922)年に竣工。続いて東教室棟が1925年に、昭和2(1927)年には遠藤が設計した講堂も竣工した。

明日館の中央棟は2階建(一部、3階建)、東・西教室棟は平屋で、左右対称の配置。軒高を抑えた立面や深い庇、屋根の水平線が際立つ外観に加え、大谷石の敷石で前庭と玄関内を段差なくつないでいることや、スキップフロアと呼ばれる数段の階段でフロアを結ぶ空間構成など、プレーリー(草原)スタイルと呼ばれるF.L.ライト特有の作風になっている。館内では低い天井の廊下を通った後、狭さから開放されるように吹き抜けのホールへ出る。ホールの高さ・広がり印象的に感じさせる手法である。また、外光を十分に取り込む大窓を

設けて幾何学模様で装飾したり、加工性に優れた大谷石を建物内の装飾に使用したりするライトらしいしつらえも見られる。明日館は約13年間にわたって校舎として使用され、同時に月刊雑誌『婦人之友』の撮影なども行われた。平成9(1997)年には国の重要文化財に指定。その後、保存修理工事が行われて竣工当時の姿に復原された。現在は、建物を維持管理すると同時に一般公開する「動態保存」形式で運営し、建物見学の他、結婚式や展示会など、年間1,000件近く利用されて、地域をはじめとする多くの人々に愛されている。



玄関前の大谷石の柱上に据えられたランタン。



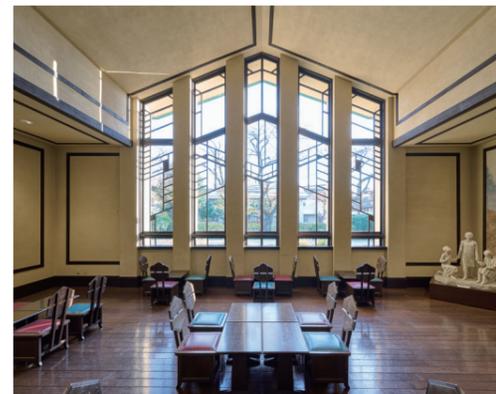
教室棟前に並び立つ列柱には雨樋が隠されている。



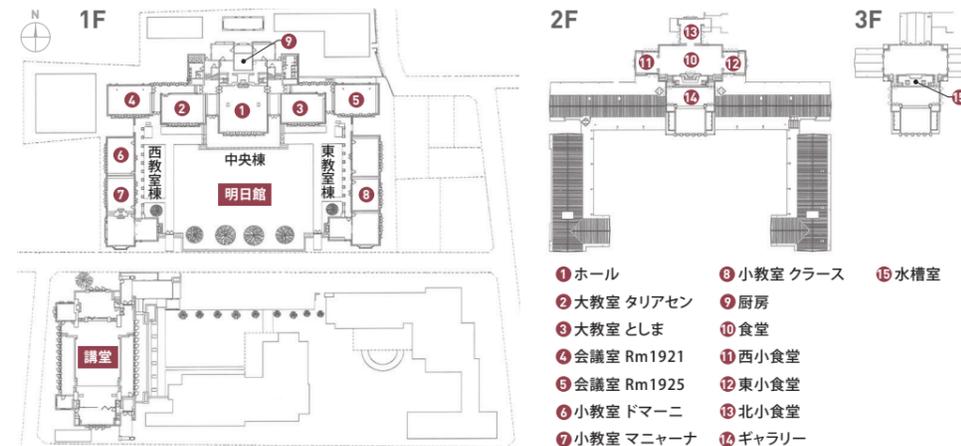
扉の幾何学模様が美しい玄関。生徒用の靴箱がある。



玄関から半階上の板間。さらに半階上の食堂など方々につながっている。



明日館のシンボルであるホールの大窓はライトらしい幾何学的なデザイン。建物との調和を考え、背もたれが六角形の椅子が作られた。



- 用語説明
- 【婦人之友】羽仁夫妻が創刊。家庭生活の改良を具体的に提唱、女性解放に啓蒙的な役割も果たした。  
【自由学園の移転】昭和9(1934)年に現在の東京都東久留米市に移転。  
東京都豊島区西池袋2-31-3  
協力：株式会社自由学園サービス
- ① ホール
  - ② 大教室 タリアセン
  - ③ 大教室 としま
  - ④ 会議室 Rm1921
  - ⑤ 会議室 Rm1925
  - ⑥ 小教室 ドマーニ
  - ⑦ 小教室 マニャーナ
  - ⑧ 小教室 クラース
  - ⑨ 厨房
  - ⑩ 食堂
  - ⑪ 西小食堂
  - ⑫ 東小食堂
  - ⑬ 北小食堂
  - ⑭ ギャラリー
  - ⑮ 水槽室

